



Title	ワークショップへの感想文⑤ 緊縛シンポジウムの学術批判への対応について
Author(s)	
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 122-122
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/86371">https://doi.org/10.18910/86371</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ワークショップへの感想文⑤ 緊縛シンポジウムの学術批判への対応について

### 匿名希望

私は当日発表者全員の報告を聞くことはできなかったのですが、河原様、小西様の報告と、その後の質疑応答をオーディエンスの 1 人として聞かせていただきました。河原様が報告された京都大学の緊縛シンポジウムについては、以前からシンポジウムに対して学術批判がなされていたこと、それへの対応が取られていなかったことを知っていたので、どのように回答がなされるのか気になっていました。半分は興味本位のようなところがあったのですが、実際に質疑応答の中でシンポジウム発表者側の意見を聞いていると、何ともいたたまれないような気持ちになりました。というのも、学術批判と問題点に対して、真っ先に謝罪という形で対応したのが若手の女性 2 人だけだったからです。そのような状況になったのは、もちろんそのお 2 人のシンポジウムでの報告にも問題があったからだとは思いますが、全体的な対応の不誠実さや遅れの責任を負うべきは責任者にあるはずなのに、なぜその 2 人ばかりが真摯に謝らなければならないのか。その言葉を聞いていると心苦しくなっていました。司会の方が言われていたように立場が弱い人にばかり皺寄せがきていることに対し、同じ世代の女性として強い違和感を覚えました。女性差別や女性軽視ということは、当事者がどう感じるかということが重要であり、第三者である一傍聴者がとやかくいうことではないと思っています。しかし、当日のその光景はもはや若手、女性が弱い立場にならざるを得ない構造が研究室や学会のなかで出来上がってしまっているのではないかと感じてしまいました。現在私は大学の講義で女性史を教えています。今の学生たちの意見を聞いていると、「ひどい女性差別というのはもはや過去のもの」と考えている学生が多いように思います。時代の先端をいくべき京都大学で女性、若手差別のような研究環境があるのだとすれば、学生にも示しがつかないうえ、女性研究者の一人としても大変残念だと感じます。

(とくめいきぼう)